

# 研究 報告

## 千葉県南房総地域におけるチャバネアオカメムシの発生量予測とメタアナリシスを用いたビワ二重果実袋の被害抑制効果の評価

千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 生産環境研究室 し清 みず水 けん健\*

### はじめに

チャバネアオカメムシ *Plautia stali* Scott は果樹類の果実を吸汁加害する重要害虫である (図-1 左)。本種は 1970 年代からしばしば全国的に多発し甚大な被害を及ぼしているが、多発生して果樹に多大な被害を与える年がある一方、ほとんど発生しない年があり、その発生数の年次変動は極めて大きい (守屋, 1995)。

千葉県は、全国第 2 位、年間約 8 億円 (平成 29 年) を出荷するビワの産地であり、そのほとんどが南房総地域で生産される。ビワは主に 5~6 月に収穫されるが、越冬後に活動を始めたチャバネアオカメムシを主とした果樹カメムシ類の成虫によって吸汁被害を受ける (図-1 右, 下)。チャバネアオカメムシは広葉樹林の落葉中で成虫越冬するが (守屋・志賀, 1986)、ビワ園は落葉が豊富な山林内に立地することが多いため、越冬場所から離脱した成虫の被害を受けやすい。実際、地域におけるチャバネアオカメムシの発生量とビワの反収との間には負の相関関係が見られる (図-2)。そのため、翌年の越冬成虫の発生量を早期に予測し、特に発生が多いと予測された年には、殺虫剤や他の防除資材の手配等の防除対策を講じることが重要である。

千葉県ではチャバネアオカメムシの生態に基づいて発生量予測モデルを開発するとともに、二重構造の果実保護袋によるカメムシ被害の抑制効果について評価試験を行い、ビワにおけるカメムシ被害を防ぐための技術を開発した。本稿ではその一部を紹介する。

### I チャバネアオカメムシの生態

千葉県におけるチャバネアオカメムシのおおまかな生

Prediction of the Abundance of *Plautia stali* and a Meta-analysis of the Damage Suppression Effect of a Double-layer Fruit Protection Bag on Loquat. By Ken SHIMIZU

(キーワード: チャバネアオカメムシ, スギ雄花生産量, 発生量予測, ビワ, 二重果実袋, メタアナリシス)

\*現所属: 同センター 病理昆虫研究室



図-1 チャバネアオカメムシ雌成虫 (左) と吸汁加害を受けたビワ果実外観 (右) および吸汁痕の断面 (下・矢印)

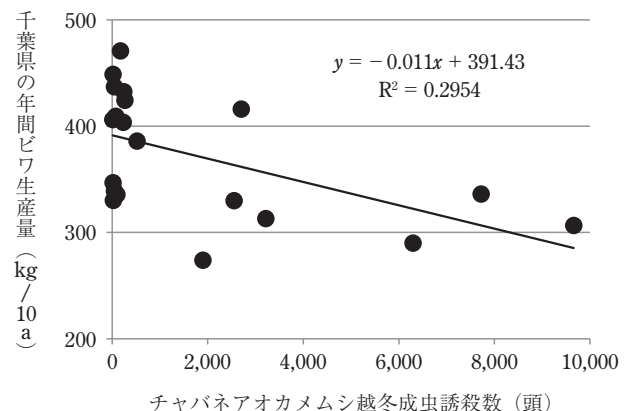


図-2 ある年の越冬成虫 (4~7月に誘殺) の誘殺数の平均値とその年のビワの生産量には負の相関が認められる。OHTANI et al. (2017) を改変。